

自然体験型ウォーキングによる里山コースの実践とその評価

橋田 卓也（社会人コース）

1. 目的

滋賀県の自然体験施設における活動の実態と課題をふまえ、自然観察を通して野生の動植物に気づき、自然を保護する意識を高めるねらいをもって、自然体験型ウォーキングを企画運営し、その評価をもとに今後の自然体験型ウォーキングの取組みに発展させることを目的としている。

2. 方法

滋賀県における自然体験施設の活動を明らかにするために、県内の代表的な9施設の特徴的なプログラム等について、各施設のホームページにより調べた。また、自然体験施設における配慮すべき事項を、滋賀県野生動植物に配慮した自然体験活動の指針により調べた。これらの自然体験施設の調査を通して、自然観察会のもとで登山、ハイキング、散策が実施されている4施設（山門水源の森、赤坂山と周辺の里山、森林公園くつきの森、朽木いきものふれあいの里）を選び、その活動の実際と課題について聞き取りを行った。

これらの施設の活動の実態と課題をふまえ、自然体験型ウォーキングを企画した。具体的には、森林公園くつきの森の管理団体であるNPO法人麻生里山センターと協議し、「里山の自然を学ぶウォーキング」のテーマで自然観察会への参加をもとに、地元住民との交流会を通じた環境学習の場を設定した。このウォーキングの参加者を募集したところ、23名の応募があり、9月24日に実施し、参加者による評価を求めた。

3. 結果と考察

自然体験施設における自然体験型プログラムへの参加者は多く、中高年が80%近くを占め、リピータも多くみられた。各施設の課題としては①ガイドや保全の担い手の養成、②運営や保全のための資金の確保、③地域の活性化、④里山の有効利用があげられている。

今回の企画したウォーキングには20名の参加があり、当日は8時にJR石山駅をマイクバスで出発し、10時にやまね館に到着した。ガイドの紹介等の後、くつきの森東山コースに出発したが、その途中でヒルに襲われる事態となって楓の森にコースを変更した。このため、自然とのふれあいや野生動植物への気づきについては不十分となったが、交流会では1960年後半から燃料革命や化学肥料と農薬による米の増産により、里山の薪や炭の需要や里山からの堆肥による稲作が衰退して、里山が40年近く放置されて荒廃がとめられない状況の説明のもとにディスカッションを行い、地球温暖化が里山の野生動植物に影響を与えていることや自然保護と保全の必要性があることへの理解が深められた。

自然体験型ウォーキングの参加者に5段階評価を求めたところ、全般的評価として、歩く時間、コースの難易度、参加規模についてはほぼ適正とみられた。参加への期待度と比べ参加後の満足度は4段階が減少して1と2の段階へ分布し、満足度は十分に得られなかった。おそらくヒルに襲われる事態が影響していると思われる。このことは、個別内容の評価項目における自然とのふれあい、野生動植物の気づき、セラピー効果では3段階を中心に評価が分散したことに反映されていた。一方、自然保護意識の向上、里山と人間の関わり、里山の保全の必要、里山の知識では4と5段階で60~90%を占め、里山の保全の必要性では5段階で70%みられ、かなり高い評価が得られた。この高い評価は、自然観察会に加えて地元住民との交流会を通じた環境学習の場を設定したことによると考えられる。